



TITLE:

田島錦治先生を憶ふ

AUTHOR(S):

小島, 昌太郎

CITATION:

小島, 昌太郎. 田島錦治先生を憶ふ. 經濟論叢 1934, 39(2): 290-295

ISSUE DATE:

1934-08-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130477>

RIGHT:

京都市大學經濟學會 經濟叢論

第 二 號

第 三 十 九 卷

昭和九年八月一日發行

哀 辭
故田島博士近影及署名
故田島博士原稿及京大弓道々場における博士

論 叢

骨牌税に就きて……………法學博士 神戸正雄
供給曲線の性質……………文學博士 高田保馬

時 論

輸出統制の諸問題……………經濟學博士 谷口吉彦

研 究

貨幣的景氣論史……………經濟學士 柴田敬
金物價と貨幣價值安定……………經濟學士 松岡孝兒
アダム・スミスの廉價即豊富論……………經濟學士 白杉庄一郎

記 事

田島博士逝く
故田島博士年譜及著書論文目錄
追憶文

織田 萬 神戸 正雄
河田 嗣郎 本庄 榮治郎
汐見 三郎 黒 正 巖
谷口 吉彦 山本 美越乃
田 島 順 小島 昌太郎
財部 靜治
大國 壽吉
石川 興二

附 録

新着外國經濟雜誌主要論題

田島錦治先生を憶ふ

小島昌太郎

一

今でも、そのときのことを、はつきり覚えて居るが、市立大阪高等商業学校の三年生であつた私は、京都大學から講義に見えて居た田島博士が、その日の財政學の講義を終へ、歸り仕度を調べて、教員室から出て來られるのを廊下に待ち迎へて、自分の希望を述べたのであつた。それは、近く同校を卒業する私として、他の同窓生のやうに、早速、銀行會社などに就職することとは氣が進まず、自分の素養を以てしては、社會に出

るに甚だ心細く感ずるがため、幸ひ京都大學の法科大學には選科生なる制度があるにより、それに入學してもつと勉強したく、それには如何なる手續をとればよろしいか、といふことをお尋ねしたのであつた。

田島先生にとつては、これは甚だ意外の質問であつたやうであるが、併し、私の希望には多大の好意を寄せられ、一應取調べの上、返事をしてやらうとのことであつた。

私は、この希望を、京都大學出身で私共に法學通論や經濟の各論の講義をして居られた同校教授の伊藤眞雄先生——今の神戸高等商業學校長——にも述べたから、それは、當時の校長加藤彰廉先生にも傳はつたのであるが、京都大學の方でも、田島先生から、當時の學長井上密先生や岡田良平總長などに話をせられ、高商を卒業するものの中に左様な希望をもつものがあるならば、選科生としてではなく、入學試験の上、高等學校卒業生と同等の取扱ひを以て、本科に入學を許可してもよろしいといふことになり、法科大學から、大阪

高商宛に希望者の數などを問合せて來られることゝなつた。私の小さき希望が、田島先生の好意ある取扱ひによつて、少し大けさに發展した譯である。

法科大學からは、他の高商や外國語學校などにも、希望者を問合された。大阪高商では最初二十人程の希望者があつたけれども、卒業の四月から、入學試験の七月までに、色々な事情で減少して、結局、受験したものは三人であつた。大阪高商以外からは、たゞ東京外語からこれも三人の希望者があつただけである。それは、他の學校にとつては、生徒の卒業後の方針も、略ぼ、決定して居つた際に、足許から鳥が立つやうに話が持ち込まれた形であつたから、希望者が纏らなかつたからである。

かくて、大阪高商からは、阪神電鐵の現事務、今西與三郎君と私との二人が、本科生として入學を許可せられた。これが、京都の法科大學に於ける謂はゆる傍系入學の最初であつて、全く、田島先生の御厚情の賜である。

この田島先生の御盡力によつて始められた所の傍系入學は、その後甚だ盛になつた。そして、私共の最初の時代には、試験の上、初めから本科に入學する制度であつたが、後には比較的容易に選科に入學する制度が設けられ、無試験制度なども出来ることゝなつたがために、却つて、高等學校卒業生の増加と共に、遂に今日では廢止せられることゝなつた。

二

明治四十一年九月、新入學生として入洛した私は、早速、先生のお宅へ御禮に伺つた。當時のお宅は、吉田山の西麓、神樂坂の北の方にあたる所にあつた新築の家であつた。玄關まで出て下さつた先生の後に、久留米耕か何かの凛々しい姿に、おもちやのサーベルを下げて、刀身を勇ましく抜き放つて飛び出して來られた坊ちゃんがあつた。その方は、この度の御葬式に、遙々、錦州から馳せ歸られた、普君である。私は、過日、お宅で普君にお目にかゝつたとき、ふと、このことを思ひ起したのである。

大阪高商で財政學の講義を聞いた私は、法科大學では、經濟原論の講義を聞いた。當時の原論は一週六時間であつたと思ふから、以前よりは、ヨリ頻繁に先生の警咳に接する機會を得た。屢々諧謔を交へた熱の籠つた講義は、今も耳底にある。限界效用説の説明に、酒の話の出るのは、あまりにも有名である。

大正十一年の三月、私が在外研究のため外遊するに當り、御挨拶に參つたとき、先生は、次の詩を與へられた。

美君舞此小東瀛

米水歐山任所行

巴里之花華府月

能教驢客緩歸程

私は、詩箋に認められたこれを、カバンに收めて、出發した。

三

翌年の夏、私がロンドンに滞在して居つたとき、先生は第三回の外遊として同地へ來られた。初めは、ヴィクトリア停車場の近くにあるヴィクトリア・ホテルに居られたが、後には、ハムステッドの素人家に

移つて滞在せられた。私は度々散歩や見物にお伴をする機会を得た。

先生は、前回の外遊のときから屢々行つたといはれるビカデリーの或る酒場へ、或る晩、私と田村徳治君とをつれて行つて下さつた。そこは、ドイツのビールを飲ませる所だといつて、大變、先生の氣に入つて居つた所である。先生は、ミュンヘンの何とかビアを注文して御馳走して下さつた。そして、ドイツビアの特色や、さては、それから思ひ出されたのだと見えて、先生の若き頃の留學當時の話などを盛に聞かして下さつた。

お酒の好きな先生を、私は、City の Royal Exchange のとある横町にある、“333 From the Wood” と云ふ瓦斯燈を掲げて居る酒場へお伴をしたかつた。それは、“333” といふ生粋の Scottish Whisky を樽から直接にグラスに酌んで飲ませる特殊の酒場で、その味がよいのである所である。酒場といつても、ジャズやダンスのある所ではなく、たゞ單に、ウキスキーを飲むだけ

の場所である。机もなければ椅子もない。客は皆、立ち飲みである。而も、その客が、世界の金融を左右するといはれる City の諸銀行のシルクハットの頭取から、お仕着せ服の門番子に至るまで、凡そ City 人種のあらゆる階級を網羅したもので、彼等は、このロンドンに於て最上といはれるウキスキーに上機嫌になつて何事かを互に語り合つて居るのであるから愉快である。グラスは一々現金と引換に受取つて、飲んだ空グラスは、周圍の、頭よりちよつと高い棚に置いたまゝ歸るのである。壁などは板張りて、百年近くもこのまゝであつたらうかと思へる古さを見せて居る。設備が素朴な上に、お客の空氣が甚だ平民的なバアであるから、先生のお氣に、きつと、はまるに相違ない所であるから、是非お伴をしたいと思つて居つたのだが、お互の都合がつかずに、終にこの目的を果さなかつたことは、今、思ひ出して、殊に残念である。

四

先生も私も、向ふ方角は異つて居るが、共にロンド

ンを去る日の切迫した九月の五日、先生の發意によつて、田村君と私とが同伴をすることになり、田園都市として有名な Leachworth の見學に行つた。斷片ながらも、私の記憶にそのときの先生が浮び出て来る。

この町は、三千八百エーカーの地域に、イギリスで初めて田園都市として、一九〇三年から、レッチウオース土地會社の經營の下に設計建設せられたもので、先生は、何故か、この田園都市に甚だ興味をもつて居られた。僅に一日の見學であつたが、先生から種々豫備智識を授けられて行つたのだし、向ふでも現地について説明を聞いたから、甚だ有益であつた。

土地會社の人が一人案内に立つて呉れて、二三の工場のある小工業地域や、停車場附近に設けられた公設市場や、住宅のまだまばらであつた住宅地域を、先生は詳しく見て廻られた。或るまだ人の住んで居ない新築早々の住宅では、先生は、臺所の設備や、給水排水の設備、温水タンクなどについて、案内の人に質問などして居られた。

先生は、それから四日目の九日にバリに向つてロンドンを離れられた筈であり、私はその前日の八日にサンブトンから、モレタニア號でニューヨークに向つて出發した。

五

先生が、立命館大學の學長となられて後、同大學に商科が設けられることとなつた。そのとき、中川總長と、どういふ話合があつたのか、私に商科の部長をやられといふお話があつた。私は、教育事務のことについては、全く不案内であり、無經驗であるから、洵にその任に適しないと思つたので、御辭退をしたのである。併し、先生は、中川總長も切にそういはれるからとて、是非、引受けよとの達てのお話なので、遂にお引受けをして、先生の指圖の下に、それをやり始めたのであつた。

大阪高商から、私が、京都大學へ入學するについて御盡力をして下さつた先生は、更に、私を立命館の商學部の仕事に従事すべく振向けて下さつた。田島先生

と私と商業學とは、終始相關聯する所の何等かの關係があるやうと思へる。

六

ロンドンに於て、先生を *professor* に御案内するの機會を失した私は、今は、全く、その聲咳にすら接することが出来なくなり、商業教育についてもお指圖を受けることが出来なくなつて仕舞つた。今はビールのシーズンである。ピカデリーのドイツビアで氣焰を擧げられた先生が、今も尙ほ、盛に談論をして下さるやうな氣がする。